鈴木瞳月

令和５年度全国高等学校総合体育大会、通称でインターハイや高校総体と呼ばれている高校生を対象としたスポーツの総合競技大会が7月22日から8月21日まで、北海道を舞台に開催される。この大会の愛称『翔び立て若き翼　北海道総体2023』を考えたのが、白糠町出身の鈴木瞳月さん(18歳)だ。

大会の愛称やスローガン、シンボルマークなどは、３年前に道内の中高校生を対象に募集が行われ、その中から鈴木さんの作品が最優秀賞として選ばれた。鈴木さんは当時、釧路江南高等学校の１年生。

「選手一人一人が勝利を目指し、北海道の広い大地で羽ばたいてほしいという願いを込めました」と大会愛称への思いを語った。

鈴木さんは２歳年上の姉の影響で小学校１年生の頃から陸上競技を始めた。白糠陸上少年団に所属し、短距離走の選手として活躍。中学３年時には少年団のキャプテンとして、チームをまとめてきた。

鈴木さんが棒高跳びを始めたのは、高校１年生秋の新人戦から。「最初は全く跳べず、そもそも棒を持ちながら走ったことがなかったので、バランスを取りながら走るのが難しかったです。自宅の周りで棒を持ちながら走っていたこともあります。知らない人が見たらただの不審者ですね」と言って笑う。

だんだんと跳べるようになってきてからは、おもしろくて仕方がなかったという鈴木さん。

「バーを越えることができたときの気持ちよさは何とも言えません。棒の反発力を利用して跳ぶのですが、失敗して棒が折れたり、マットがないところに落ちてしまうこともあります。そういう恐怖心はありますが、高く跳べたときは、それにも勝る爽快感です」

高校３年時、北海道高等学校陸上競技選手権大会で自己ベストを20㌢も更新し、２㍍80㌢の記録で見事に３位表彰台へ上った。

「これまで練習でも跳べなかった２㍍80㌢を大会中に越えることができて、自分でも驚きました。なによりも顧問の先生や陸上の仲間たちが自分事のように喜んでくれたことが一番うれしかったです」と鈴木さん。

現在は大学で棒高跳びを続けている。

「棒高跳びに挑戦したことで、自分の可能性が広がりましたし、いろいろな経験をすることもできました。陸上をやっていて本当に良かったです。自分を導き支えてくれている人たちへの感謝の気持ちを忘れず、日々自己ベスト更新を目指して頑張ります」と今後の意気込みを語った。

『翔び立て若き翼―』は、棒高跳びを始めたばかりの鈴木さんが自身を鼓舞していた言葉なのかもしれない。“さまざまなことに挑戦し、自分を信じて努力することでどこまでも高く跳ぶことができる”と、この言葉は全ての若者たちにエールを送っている。

すずき　しづく

2004年8月20日生まれ。白糠町出身。白糠中学校卒業後、釧路江南高等学校へ進学し陸上部へ。棒高跳びで2022徳島インターハイ出場。現在、仙台大学１年生。好きな食べ物はチーズとイチゴ。

「棒高跳びに挑戦したことで、自分の可能性が広がりました」

◀北海道総体２０２３のポスター